
僕達のA c c o r d

デン助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達のAccord

【Nコード】

N01910

【作者名】

デン助

【あらすじ】

啓示は錬のピアノに憧れて、自分も人の心を動かせるような演奏がしたいと音楽の道に進んだが、ピアノの音色に錬の影を探して、それを追うだけで満足していた。ある日、錬が事件を起こした事で、啓示はコンクールへ出場し、彼女の悪癖を直そうと考えた。

寒い部屋で、冷たくなった指先を、そつと鍵盤に乗せると、それは滑らかに動き、鍵を押していくと、グランドピアノは音を奏で始める。冷房の効き過ぎた部屋に長く居た為、身体は冷え切っているが、音を綺麗な状態で響かせたいという部屋の主は、そのまま長くここに居て、食事も摂らずピアノを弾いている。

黒く、長い髪は電気も点けない暗い部屋に溶け込んでいる。前髪が長い為、鼻先まで隠れているが、女性である事が服の上からでも解る。彼女は学校のない時、毎日こうして演奏を続けている。何かに憑かれたかのような、偏執的な執着心がそうさせている。

前髪の隙間から時折、覗く眼が特にそうだった。病的なまでの拘りを持った人間は、自ずとそれが眼や顔に出るといように、少女もまたピアノ以外のものを捨てた人間で、音楽に憑かれた人間だった。眼の奥に、異常なもの 言うなれば狂気が覗く眼である。

指の間にある股を裂き、可動範囲を強引に広げた処置を施す事もあるというピアノリストだが、彼女はそれを自分で行った過去がある。それは自己破滅願望も手伝い、やや行き過ぎたような、酷い傷痕の残った手が 鍵盤の上を踊る。踊り続ける。演奏曲目は、彼女が現在、作曲している未完成のものだ。譜面には既に何度も書き直された跡がある。時折、シャープペンシルでそれらに書き加え、または修正をして、演奏を続ける。

時間が無い、という焦りがあった。失敗が苛立ちを生み、それが音を濁らせると、彼女の顔は歪んでいく。やがて我慢できなくなると、立ち上がり、近くのテーブルの上に置いてあったカッターナイフを取って 手首に当てた。

横に滑らせると、赤い線が手首に走った。自傷行為である。こうして彼女は平静を取り戻す。自分の血を見ると落ち着く、傍から見たら危険そのものの行為だ。しかし彼女はそれを止める事はない。

余程深くやらなければ死ぬ事はないと解っているからか　それとも日頃彼女を苛む、頭痛という持病をひと時でも忘れたいのか。荒かった息が普段のリズムを取り戻すと、彼女はまたピアノに向かった。鍵盤に血痕が出来るが、眼もくれずに指を躍らせた。

* * *

草薙啓示くさなぎ けいじは、ピアノの少女の弟分とされていた。子供の頃から一緒にいるのだが、その昔に聞いた少女の演奏に惚れ込み、一緒にいる内に少女がどういった人物かを知るに至り、やがて眼が離せなくなり、放っておけなくなった経緯があり、それが彼の性分をよく表している。

実際、少女は啓示がいなければ自殺していたであろう、危うい精神を持った人間である。少女からすれば、本人は言明しないが、彼がいなければ生きていけない程には、弱く、儚い存在だった。

電車の中で、高校の制服は窮屈だ、と少女が言った。

「仕方ないじゃん、うちじゃ私服登校は認められてないんだから」傍らに立つ啓示がそう返すと、少女の、昨夜が病的だった眼差しはなりを潜めているのが映った。穏やかで、頼りない弟を見守る姉のようである。

電車の中、座る場所がないくらいには人がいる車輦内で、車窓から外を見ると、見下ろす形で街の風景が見えた。

吊り革に掴まっていた啓示が、同じようにしていた少女やまが八坂 錬れんの手を見ると、驚いて指差した。

「姉ちゃん、また傷、増えてるじゃないか。どうしてそんな事するんだ、止めるっていつも言ってるのに」

「大丈夫だ、死にやしない。加減は解ってるんだ、いつもやってるからな」

啓示は、色々な事情を抱えている錬の顔を見た。普段通り、あまり顔の見えない長髪で、根暗で引き籠もりな為、病的なまでに

肌が白い。線も細い。触れれば折れそうな程、頼りない見た目だ。そんな事より、と錬が言った。少しかけ啓示より背が低い。

「お前、来週末のピアノコンクールに出るんだよな。練習はどうだ、はかどってるか？」

苦い表情を作ると、啓示は、いやあ、と言った。あまり順調じゃないと話すと、錬は詰め寄る。

「そんな事じゃだめだ。もう時間もないんだぞ、お前、焦りとかないのか」

少し舌足らずなのは、話す事が得意ではないからである。

「僕は、姉ちゃんみたいに才能ないからさ。精々、ピアノ教室の先生達に恥をかかせないように、教科書通りの演奏する事しか出来ないよ」

「教科書通りに演奏しても、そこには演奏者の感覚《SENSE》が表出する。お前が演奏する理由がそこに込められている。だから、先生もお前を推したんだろう？」

僕には解らないよ、という。彼は単純に錬に影響されてピアノを始めただけで、そこに才能や恵まれた家庭環境がある訳ではなかった。

「何でだ。お前のピアノは、いいのに」

錬は会話が不器用で、口下手という事もあり、言い回しが抽象的ではつきりしない部分が多くある。しかし、だからそこには子供のよさに素直な感想が込められる。

啓示は、それも錬という姉の魅力だと思っっている。

「姉ちゃん、僕は自分が有名になりたいんじゃない。姉ちゃんを追いかけて、ピアノの音に影を探してるだけなんだよ」

錬は、だから、それに反論する言葉をもたなかった。

ふいに、錬が顔を顰めると、頭を押さえた。

「どうしたの、いつもの頭痛？ どうしようか、座る場所ないよ」
平気だ、という錬の言葉に、しかし落ち着かない啓示を見て、妥

協案を提示した。

「ドアの近くで良かった。お前、俺が周りから見えないように壁になれ」

電車のドアに背を預けると、言われたままに、啓示が鍊の顔の横に手をつき、周りの視線から あったかどろかとは定かではないが 遮った。

鍊が身体から力を抜き、楽な態勢を取る。恋人のようにそうしていると、啓示は言った。

「姉ちゃん、また夜遅くまで練習してるだろ。あんまり無理しない方がいいよ、身体弱いんだから」

心配してくれるのはお前だけだ、と口にする鍊を、啓示は責めた。そう思っているのは姉ちゃんだけだ、と。

鍊は、周囲から向けられる愛情や親しみというものに酷く鈍感だと、啓示は知っている。だから彼女は追い詰められているように、常に強迫観念を感じ、邪魔者だと責められているように感じているのも、彼は知っている。

実際、それは彼女の思い込みで、周囲は彼女を 天才ピアニストである八坂鍊を、どう扱ったらいいのか解らないのが大半だ。繊細に過ぎる為、ふとした事で傷ついてしまうからである。

しかし、音楽の専門家から天使の指先と称えられる鍊を、啓示は誇りに思っている。

啓示が指先で、鍊の前髪をどかすと、美しい双眸が現れる。

「罰として。僕と朝メシの刑」

「何だ、そりゃ」

「実は僕も食ってないんだ。寝坊しちゃってさ」

「はぁん」

呆れて苦笑する。鍊はこの少し後に、啓示がよく自分を見てくれている事に気付く。

俺も、という言葉の意味。彼女が朝食を摂っていない事を、顔色を見て見抜いたのだった。

危ういバランスで心の均衡を保っている八坂錬は、美貌の少女だった。コンクール時の正装などではそれが顕著に現れ、そうして天使の指先と言われる由縁となったというが、本当かどうかは解っていない。しかしそれを、そうかと頷かせる事が出来る程度には、彼女の美貌は人の眼を惹きつけるのである。

それが、人目が嫌いで、視線を避ける為に髪を伸ばして、顔を隠すようになった経緯だった。事実、彼女は誰との間にも壁を作っている。それが前髪という形で表に現れてはいるが、心の方はもっと根深い。

彼女は、啓示以外の人間を信じられないようになっていた。幻聴のように囁く、彼女だけに聞こえる音が頭痛という偽装を必要とする程、彼女の内面は異常な形にあるからだ。

耳に届く音の全てが、音階に分けて聞こえるという天賦の才、絶対音感の代償のように、それは彼女に付いて憑いて回る。幸いなのは、それが演奏や試験などの、集中している時には襲って来ない事だった。

誰にも聞こえない。誰にも解らない。誰にも伝わらない音。それは何かを伝えたがっているようで、彼女の意識の奥で、密やかに囁く。

時に激しく。時に穏やかに。しめやかに、厳かな音を奏でるそれを、彼女は神託オラクルと呼ぶ。何故なら類稀な演奏技術を持つ錬でも、これを現実に演奏して現す事は全くの不可能だと解ったからだ。どんな楽器のどんな音でも、不可能と。これを人に伝えるには、神か何かのような、人ならざるものでなければ不可能だと、解ったからである。

酷く耳障りな事もあるれば、心地良い事もあるそれを、彼女は啓示に打ち明けた事がある。子供の頃に医師や両親に言った事もあるが、

カウンセリングを受けて、そういつた幻聴を生まれ持つてしまったという判断に終わったのだが、啓示だけは彼女を信じた。

僕も聞いてみたい、と。姉ちゃんだけずるい、と言った昔のそれを、彼女は未だに覚えている。だから、彼女はこの神託を嫌いにならず、神託と名付ける程度には、愛着を持つていた。

その日の夕方の事である。ピアノ教室にいた啓示の元に、一本の連絡が入った。母親からのもので、それを聞いた彼は、すぐさま練習を中断し、病院へと向かった。

どうしてそうなったのかが、彼には解らない。彼女の事は解り過ぎる程に解つていたつもりだったのに、それは所詮、つもりだったという事でしかない事を、思い知らされた気分だった。

八坂錬の投身自殺未遂。校舎屋上からのそれは、後日、大きなニュースとなつて世間を賑わす事になった。

* * *

白いベッドに横たわる彼女は、ギプスで身体を固定されていた。肋骨が数本折れているという話を医師が語ったが、啓示は呆然としていて、それを聞いていなかった。

錬の両親は大きな会社の重役で、この場合、顔だけでも見せるべきであるう状況に、忙しくて来れないとの一報だけを寄越すに至った。錬の方はそれに諦めもついているらしく、取り乱す事もない。ただ、やはりあの二人は俺を愛していないんだな、と呟くだけで。

両親以外も、錬ならそれはいつもの事だ　と。

ただ、啓示だけが泣いて。彼女に縋りついている。錬は、そうするのがいけないと思いつつも、満たされる心に恍惚として、彼の背に手を回した。

歪んだ心は、誰かに心配され、必要とされる事で、満たされるのである。

次の日、お見舞いに来た啓示と、鍊は一つの約束をした。

自殺未遂事件を起こした鍊は、怪我也あって、来週末のコンクール出場権を事実上、失っている。だから俺の代わりに頑張ってくれないか、というものだ。

啓示は、驚きはしたものの、それに頷いた。

その代わりに、啓示の言う事を何でも一つだけ聞くという、一つの約束ごとである。

その日の夜から猛練習を始めた啓示は知る事ではないが、鍊の自殺未遂事件には当然ながら理由がある。彼女の危うい精神を知らないクラスメイトが、過去、鍊が出場したコンクールを映像で見たらしく、それで近付こうと、言い寄ってきた為だ。

嫌ならば適当にあしらうのが普通であるが、八坂鍊には、当然のようにそれが出来ない。自分を利用しようとしている、というように異常なまでに強い警戒心が働き、その男子生徒が、自分に近付いて何をするつもりかを、極めてネガティブに予想させた。そして行き着く先が投身自殺というのは、彼女の壊れた精神を如実に表している行動だろう。

彼女は誰も信じない。受け入れようとしないのである。ただ、啓示だけがその例外である。代償として、啓示になら何をされても良い、というように行き過ぎた愛情を抱いているのが、また彼女のらしさとも言えた。依存している、とも言える程度には。

そうした経緯を以って、今回の約束は結ばれる事になる。

未遂になった事に関しては、運良く落ちた先に車があつて、その屋根がクッションとなった。というのが警察の見解であり、事実として、その痕跡が残されている。

しかし、彼女が、そうした計算高さを持ち合わせて、自殺を未遂としたかは定かではない。四階もの高さから落ちて、狙ってそこへ落下出来るものなのか、確かではないのに、である。

啓示という少年には、持病があった。生まれつきのもので、生涯根治する事のない病である。血液を全身に送る、心臓のそれは、しかし啓示が激しい運動などをしたりしなければ影を潜めているので、あまり重く考えられずにいられた。

それは、度重なる不規則生活と集中状態の持続により、徐々に疲弊を蓄積し、やがて、最悪の形で表面化する事になった。

その少し前であるのだが、市民ホールで開かれたピアノコンクールで、啓示の演奏に観客は拍手を送り、彼は一位ではないものの上位入賞を果たした。錬はたいそう喜び、彼女はそうして自傷行為を止めるように啓示に要求されると、二つ返事で頷いたのだが、これが守られる事は、ついに無かったのである。

「姉ちゃん、髪切った？」

無事に退院した八坂錬は、少しだけ短くした前髪を指先で弄び、制服のまま、書店へと向かう商店街の道中にあり、横にいた啓示は朝方から聞こう聞こうと思っていたそれを口にした。

「ああ、今度、秋に大きなコンクールが開かれるからな。ナントカいう有名な先生から参加の招待状がきたんだよ」

啓示は頷き、レベルの高いそのコンクールに憧れを抱いている事を話すと、錬に言った。

「姉ちゃんなら入賞は確定だね。一位だつて目指せるでしょ」

しかし、彼女は首を振った。自信がなさそうに 興味さえ、ないように。

「俺は演奏を聴いてもらえるのが好きだ。聴かせる、というように一方的な押し付けじゃない。音楽に込められた俺の感覚《SENSE》を、音という広がりでもって人に伝え、世の中に残す事が出来るからな。俺はこんな人間だし、そう長生きは出来ないだろうから、こうして後に残るものを、評価されるのは、まあ、嬉しいんだが…

「あまり、技術だとか表現力だとか、そういったもので数値化されて他人と比べられるのは、嬉しくないな」

「でも、姉ちゃんの演奏は僕の生き方を変えたよ。独りぼっちだった僕に、こんな世界もあるんだと教えてくれた。だから、姉ちゃんが世の中に評価されるのは、僕は凄く嬉しい」

「お前はひどい奴だ。そうやって俺に、ピアノを弾かせるんだから、苦い笑いを作って、仕方ないと言った。鍊がそうして髪を弄ると、啓示の眼がその手首で止まった。傷が、増えていた。」

「どうして……」

「耐えられないんだよ」

「そう、彼女は応えた。」

「何に」

「時代《SCENE》は俺の音楽の表面だけを見る。その奥にある感覚《SENSE》を感じてくれない。悪いのはマルチメディアだ。スピーカーから流れ、テレビに映る俺の姿と音楽だけが世の中に広まっていく。直に聴く事ではか伝えられないものを、そうやって余分なものとして簡略化し、削り、終いにはCDとかに焼いていつでも聞けるようにする。俺の音楽が広まるのは、正直とても嬉しいが、しかし、そうやって機械化されていくというか、音楽をただの演奏と思われてしまうのには、耐えられない」

「姉ちゃんの音楽は、ただの演奏じゃないって事？」

「音楽に国境はない。人種の違いも言語のそれさえ、無意味だ。ただ人の耳に届き、時にそれを肌で感じて、音に込められた声なき声を心で感じる。絶対音楽。バッハなんかの古典派に代表されるものだが、ああいう古い曲が今までそうやって伝えられてきているように、音の連なりだけで、人は語れるんだよ。今の世の中に溢れている、メッセージ性の高い標題音楽ではない。例えるならホルストの組曲にある惑星なんかが顕著だろう、あれは木星とか火星を表現しているんだぞ。ただ、音の連なりだけで。俺は、ただ、そういったものを直に聞ける時代《SCENE》に生まれなかつたのを悔やむ」

ひたむき音楽と付き合ってきた八坂錬は、並ならぬ情熱を胸に秘めている事を、啓示に明かした。会話が苦手で舌足らずな彼女だが、必死に言葉を繋げる姿に啓示は感じるものがあつたので、続きを聞いた。

「でも、それが僕との約束を破る理由には、ならないんじゃないかな」

「……そうだな、すまん、訳の解らない事を言つて。感情的になつちまった。だけど解つてくれ、俺は、お前との約束を好んで破つたわけじゃない。ただ、そう、俺は、寂しいんだろう」

自傷行為は衝動のようなもので、錬にはそれを言葉で説明することとは難しい。啓示にとっては少し、難解な言い回しだった。

「寂しい？」

「結局、音楽で表現出来るのは自分の持っているものだけだ。自分の感覚《SENSE》が生むものだけだ。そこに他人はない。余計な雑音が入らない。美しい芸術だ。だけどそれは同時に、孤独でも、ある」

他人との調和は、交響曲のように集団で演奏するものには不可欠である。しかし錬はそれが、当然のように、出来ない。誰かを必要としていながらも、求める事を拒否されるのが怖くて、ただ、それを音楽に込める事で表現する。しかしそれは、伝わらないと思つているのだ。

「俺は独りぼつちだ。演奏で誰かに、俺の存在を伝えたいだけなんだ。だけど、それは、音楽に込めたその感覚《SENSE》は、時代《SCENE》によつて果たされる事はない」

啓示は、泣きそうな表情をした彼女の手を、優しく握つた。

僕がいる、と。そういつた意味合いを込めた行動だったが、彼女はそれに随分驚き、また、彼女自身が抱いている啓示への愛情もあつて、縋るように抱きついた。

独りぼつちは嫌だ、と彼女は泣いた。

夜、ベッドから抜け出した啓示はピアノの譜面を見つけて、それを眼で追った。啓示には、それが楽譜である事が最初、解らなかった。

記号や音符がない。それどころか文字、言葉でさえ見当たらない。グラフか図のようだった。

「気になるか？」

錬はシートで身体を隠し、啓示の持っているそれを、面白そうに見た。

「ソイツは俺のとおきだ。本当ならこの間のコンクールで演^やるはずだったんだが、あんな事があつたしな。正直、次のコンクールは全国から腕のいいのが集まるから、それを演^やつていいものかどうか不安だけど、まあ、フリーの部門なら平気だろ」

「これは、楽譜なの？」

「ああ。俺の全てをつぎ込んだ、ソイツは楽譜だ。ようやく出来上がってきたところだな。演奏する事自体が危険なシロモノだよ」

「演奏が危険？ 何それ、音楽なの？」

「恐らく。お前の中の音楽の常識をぶち壊すだろう。俺の表現するそれは、そつだな、俺の感覚《SENSE》を余すところなく現す。言^ワうなれば単身楽^{ワンマン・オーケストラ}団。曲名は 神託《Oracle》だ」

遺伝子がお前を求めている、と彼女は言った。

彼女の指先は日増しにボロボロになっていく。鍵盤を叩いて出来るような傷ではない。鋭い刃物で浅く傷つけるようなそれに、啓示は不安になって問い詰めたが、錬は秋になったら解る、と繰り返すだけだった。

天使の指先は、傷だらけになりながらも音を紡ぎ、やがてコンクール当日を迎える。

事件はそこで起きた。原因は、八坂錬の演奏ではあつたが、果たしてそれに何人が気付いたであろう、破滅的な演奏 鍵盤を弾いていたかと思えば、思い切りピアノの譜面台を手で叩き、祭囃子の

ようにリズムを取ると、今度はロングヒンジという、斜めに開いているピアノの屋根のような部分を、横手に回ってリズムに乗り、叩く。革靴で床を踏み鳴らせば、鍵盤によって弾かれるはずのピアノの弦を、指先で引き、叩いては弾く事で、音楽を奏でる。

髪を振り乱し、演奏というよりは戦っているようなそれを、果たして何人が音楽として受け止められたのかは定かではない。

実際に　　そういった演奏方法は存在する。在るが、誰もやらな
いだけだ。

指の皮は裂かれ、血が流れると白い鍵盤を赤く染める。汗を拭わず、ただ憑かれたように音楽を奏でる。そうして　文字通りピアノの全てを使って奏でられる、八坂錬の音楽に観客は戸惑った。

だが、それも最初だけ。というよりは、戸惑う事さえも　先が気になる　という誘惑力を生む原因となる。

そうして。その音楽は人々を魅了する。自ら破滅へと突き進む人間に、魅せられるのだ。そこには理屈も理論も道理もない。どうしようもなく。ただ、惹き付けられる。

八坂錬の言う通り、音楽に言語の違いや国、人種の違いなど存在しない。そこにはただ人を引き寄せられるだけの魅力があるか否かである。そういった面で、八坂錬は天才と言えた。

未だかつて大舞台で、このような演奏を行った例はない。中継されるその演奏光景は、世間を風靡するように騒がれた。

傷だらけの天使。前衛音楽。音楽の音楽による音楽の為の音楽。様々に言われた。

しかし、彼女の伝えたいものは誰にも伝わらない。

ただ一人　にも。

啓示は、このコンクールに出場した。彼はあれから一生懸命に頑張った。先のコンクールでの演奏が高名な演奏家の眼に止まり、それで参加出場権を獲得したのだが

それが良くなかった。自分のレベルを高めようと昼夜練習に励み、元来生真面目だった性分も災いし、周囲の期待に応えようとして

自滅した。

弱かった心臓が悲鳴をあげ、鍊の演奏後、彼は病院に運び込まれた。

鍊はそれを知って絶望し、自分の音楽が表面的にしか評価されない時代にも嘆き、楽屋にて手首を傷つけた。

普段なら、それは浅く滑らせるだけだろう。赤い線がうつすらと出来るぐらいである。しかし啓示の倒れた事態に責任を感じ、助かる見込みはほぼゼロに近いと言われ 練習の指導にしていたのは彼女である また、自分の音楽では何も伝わらず、何も出来ないと思い込み、彼女はカッターナイフを、手首に深く、食い込ませた。

眼を開けると、白い天井だった。しばらくして看護師が来ると、慌てて医師を呼びにいったようだった。

啓示は、奇跡的に助かった。偶然遺伝子が一致した臓器が見つかり、九死に一生を得た形だった。それでも心臓移植という事で体力を大きく奪われ、後のリハビリも困難を極めたが、彼はどうにかピアニストとして復帰が出来た。

同時に運び込まれたという患者の噂も聞いて、彼は少し気になったが、それよりも早く鍊に会いたくて、彼女の家へと向かう。

八坂鍊はいなかった。両親の姿もないので、家に入る事さえ出来ないのだが、電話のコールにも出ないという事が、彼女の不在を証明した。啓示は自宅に戻り、事の詳細を両親に尋ねた。そして八坂鍊の自殺を知り、それによって、ドナー登録されていた彼女の心臓が自分に移植された事を知った。

奇跡的なまでの適合率によって、彼女の心臓はごく弱めの拒絶反応を抑える薬を、少量摂取するだけで啓示のものとなり、正確に鼓動を刻むようになった。

啓示は、胸に残る手術跡を鏡で見て、涙を流した。

自分の愛した八坂鍊は、もうこの世にいないのだ、と。

翌年、草薙啓示は再び秋のコンクールへと出場し、見事金賞に輝いた。そこに至るまでの練習量や技術、知識の吸収においては眼を瞠るものがあり、彼のピアノは芸術的に進化していき、かつての八坂錬を彷彿とさせるような演奏をするようになった。

八坂錬の心臓。ドナーの記憶が心臓移植によって、移植者の脳に甦るという説がある。啓示はそれを知らなかったのだが、あの楽譜神託のグラフィジミタ譜面が読めるようになった事実、何かを感じたのは間違いない。

金賞に輝いた彼は、表彰の場で、語った。

「この曲は元々、未完成でした」

時代が自分を受け入れてくれない、と彼女は言った。

「私に移植された心臓により、彼女はこの曲を完成させる事が出来ました」

独りぼっちの寂しさを、彼女は啓示を求める事で、それを癒した。

そうして二人で一人になる事で、神託は完成した。

「私はこの曲で、一つのメッセージを皆さんに伝えたいと思います」

彼女の演奏を時代に残す為に、啓示は言った。

「あなたは独りじゃないという事を」

八坂錬作曲、神託 改め、Accord^{アコード}。調和を意味する言葉であった。

今も彼を苛む神託は、彼女から渡された贈り物であろう、と啓示は思う。しかしそれを受け入れ、演奏という形で表に出す技能を得た今は、傷ついた指先も勳章のように思えた。

それがマルチメディアによって世界中に広まり、名声を得ると啓示は諦めがついた。CDによってそれがいつでも聞けるようになる、伝えたいメッセージが伝えられない寂しさに気付いた。

あの日、彼女の居た場所へと辿り着けた感慨深さを胸に、啓示は

墓碑の前に立った。

「姉ちゃん。僕、頑張ったよ」

ピアノの神様、神の啓示などという陳腐な謡い文句で噂されるようになった二四歳の啓示は、世界的なピアニストになったのだが、その心はあの日のまま、成長する事はなかった。

「だから、もういいよね。姉ちゃんも、独りぼっちは嫌だよね」

刃物を収集するクセのあった姉の、それは形見であったので、数年経った今でも綺麗な状態で保存されていたカッターナイフを、取り出す。

啓示の手首には幾筋もの痕があった。リストカットという自傷行為。どんなに辛い夜も自殺を想えば慰められる、という先人の言葉どおり、それは啓示を今まで生かしてきたのだが、既に限界だった。心臓が、時折、思い出したように、鼓動を止めるのである。彼はそれを、姉が自分を待っているサインだと思っようにした。

あの世で鍊が待っている、と思うようになると、啓示は救われた気分になった。自分がやった事は間違いじゃなかった、彼女の伝えたかった事に答えるメッセージを込めたAccordは、彼女の心臓なしには完成しなかった楽曲である。

紅葉の舞う秋、彼女がいなくなったのと同じ時間に。

どうかこの曲が後世まで残るように、と祈りを込めて、彼はカッターナイフを手首に強く、押し当てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0191o/>

僕達のA c c o r d

2010年10月11日19時56分発行